縄文と札幌　― さっぽろの縄文を追う ―

■　概　要

日本列島には、旧石器時代から連綿と続く人々の暮らしの痕跡がたくさん残されています。ここ札幌でも旧石器時代のものと見られる石器が見つかっていますが、人口 200 万人に迫る大都市となった札幌の地で、人々が集落をつくって暮らしていた明らかな痕跡は、今から約 8000 年前頃の縄文早期に現れはじめます。

縄文の特色を決定づける「土器」の発明は、地球温暖化による気候変動と環境変化の中にあって、人々の食生活に劇的な変化をもたらしました。食材を煮沸することで栄養・衛生面が飛躍的に改善され、狩猟・漁労・採集という複合的な生業活動による安定的な食料調達サイクルを確立させたことによって、定住する狩猟採集民が誕生したのです。さらには、定住がもたらした生活の余裕によって、豊かな精神的・芸術的文化が花開いていったと言えるかも知れません。

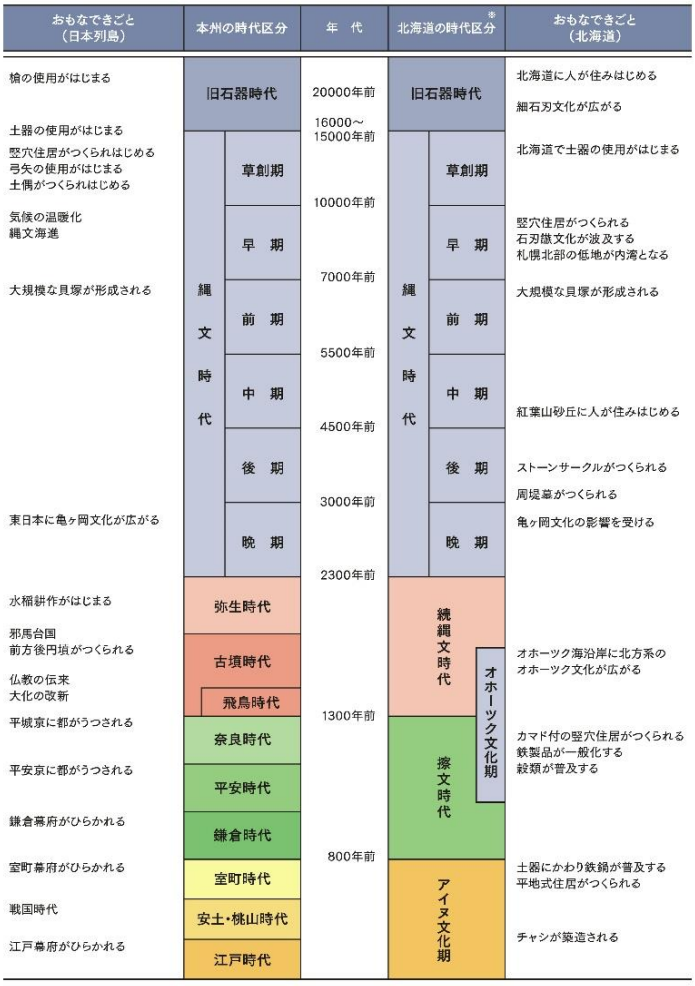
私たちが暮らす北の大都市「札幌」のまちなかにも、その足下には、たくさんの縄文遺跡が埋もれていて、今の私たちの暮らしは、まさにその上に築かれています。この札幌の「縄文」がどんな姿をしていたのか、その痕跡を辿ってみると、自然と調和し他地域とダイナミックに交流しながら、豊かな暮らしと高度な文化を育んだ先人たちの姿が見えてきます。

■　札幌の縄文の姿とは

2021 年 7 月「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されました。「北海道・北東北の縄文遺跡群」とは、“津軽海峡を挟んで、北は札幌、南は盛岡・秋田辺りまでを円で囲んだ地域一帯をひとつの文化圏として、およそ１万年以上にも渡って繁栄した縄文文化を代表する遺跡の集まり”のこと。札幌に一番近いところでは、縄文後期の記念物（構築物）で有名な「キウス周堤墓群」（千歳市）が世界遺産を構成する資産のひとつになっています。

では、構成資産を持たないここ札幌はどうだったのでしょうか・・・？

実は、札幌でも縄文の遺跡はたくさん見つかっています。意外に知られていませんが、札幌は市域内だけで様々な地形を見ることができる珍しい地理環境にあります。道央と道南を分断し市域の南西部を大きくしめる山地地域。今から約 4 万年前の支笏カルデラ超巨大噴火を物語る南東部の台地・丘陵地域。豊平川によって形成された扇状地は教科書のような扇形を形成し、そして縄文海進と呼ばれる温暖な時期には大



※北海道の時代区分は、考古学における一般的な時代区分を示しています。

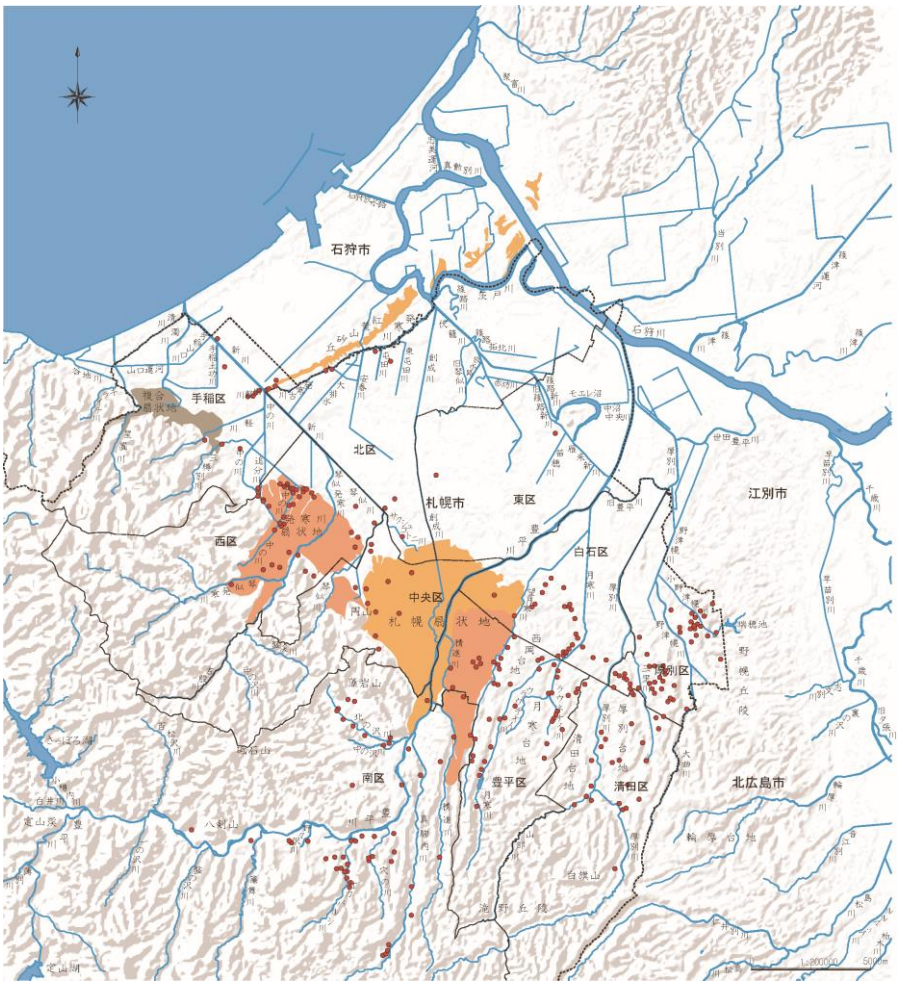
年　表

部分が内湾となっていた市域北部。その内湾が消失していく過程でできていった砂丘地帯。やがて寒冷化と河川が運ぶ土砂によって内湾が陸化した結果、広大な湿地や泥炭地を形成した北部低地。そこを縦横に巡る河川とその河川がつくる自然堤防など、ひとつの行政区でこれだけバラエティに富んだ地形が観察できる大都市は中々ありません。

札幌の縄文文化の痕跡は、この地を潤す大小の河川に沿うように、山合から台地・丘陵、平地から低地、石狩湾近くの海岸砂丘まで至るところに残されていて、市内でこれまで見つかっている縄文遺跡の数は 270 か所以上にものぼります。まさにここ札幌は、縄文のむかしから人々にとって暮らしやすく豊かな土地だったのです。

■　札幌の縄文遺跡の変遷

そんな中で、今から約 8000 年前頃の縄文早期、この札幌の地を生活の舞台に選んだ人々が現れます。この頃、地球規模の急激な温暖化は既にピークを迎えていて、今よりも年平均気温で２℃ほど、海水面も２～３ｍほど高く、現在私たちが見慣れた“札幌”とはまったく違う風景が広がっていました。藻岩山・円山などはもちろん、天神山の上からも、眼前に広がる海や入江が見おろせていたはずです。人々は、東部の台地や丘陵の河川沿いに居を構え、山海の豊かな自然の恵みを上手に利用しながら、長きに渡ってこの地に暮らし続けていたのです。



札幌市内の扇状地と縄文遺跡分布

桃色・燈色（下）・灰色塗り：扇状地、燈色（上）：砂丘、赤色点：縄文遺跡

気候の温暖化がピークに達すると、今度は静かに寒冷化が進行していきます。約 6000 年前頃までには、大小の河川が土砂を運び内湾は消失しますが、縄文中期に相当する約 5500 年前頃から 4500 年前頃までは比較的安定した温暖な気候が続き、縄文のなかで最も多くの遺跡が残されます。この頃から、彼らの居住域は東部の台地・丘陵に加えて、発寒川扇状地や紅葉山砂丘にまで広がっていきます。その後、今から約 4000 年前頃の縄文後期以降は、寒冷化とともに遺跡の数は目に見えて減っていき、それまでほとんど遺跡が残されることのなかった札幌扇状地や沖積平野の低地部にも遺跡が残されるようになっていきます。札幌の地で人々が暮らし始めてから 6000 年という膨大な月日が流れ、縄文文化も終わろうとする今から約 2300 年前頃、ここ札幌での暮らしはどのように変化していったのでしょうか？　現代の私たちにとっては、永遠とも思えるほど長きに渡って続いていた縄文文化が、続縄文文化へと移り変わって行く頃の札幌をちょっとのぞいてみましょう。

■　縄文晩期の札幌　－２つの特徴的な遺跡からわかること－

当時、おそらくは市域内で最も地盤が安定して水はけが良く、どこへ移動するにも都合が良くて暮らしやすかった場所のひとつが発寒川扇状地の扇端部でした。今の西区二十四軒あたりから地下鉄発寒駅界隈にあたります。JR 琴似駅のすぐそばで見つかった「N30 遺跡」では、当時の川縁に家を建て、小さな集落をつくり、小～中型の哺乳類をはじめ、鳥類、ハ虫類、魚類、海獣類、木の実など、様々な食材を利用して暮らしていました。戸数は少ないものの、家の周囲には無数の屋外炉（たき火跡）が見つかっていて、その周りからは大量の土器や石器が出土しました。勾玉やコハク玉といった装飾品なども含めて、総数約 7 万点にのぼる大量の遺物が発見されたことがこの遺跡の特徴です。なかでも目を引くのは、お墓に副葬されたサメの歯を使った祭祀具？（あるいは装身具）と、そのお墓の縁に置かれていた土偶です。土偶はバラバラに壊された状態で見つかりましたが、すべてのパーツを接合してみるとほぼ完全な形に復元できました。その姿は、手足が省略された人の形を模していて、髪を結ったような頭部、顔は仮面をつけたように張りだし、体には「工字文」と呼ばれる文様が全面に刻まれていました。この文様は、当時、東北地方で広く用いられていた土器の文様で、縄文晩期には既に東北地方の人々と、物理的にも精神的にも活発な交流があったことを示す貴重な資料となっています。

N30 遺跡出土土器

N30 遺跡出土土偶

ここで、ふと疑問がわいてきます。二十四軒あたりだと、当時は既に相当内陸に入った位置にあったはずですが、彼らは一体どんなルートを使って海の向こうの地域との交流を行っていたのでしょうか？

縄文の人々が遠方と行き来する際は、通行の道しるべとして河川が重要な役割を果たします。この頃、河川の姿や流路は、現在の河道とはまったく異なっていて、その疑問に答えるためのキーポイントとなるのが、実は、今も昔も札幌の母なる大河といえる“豊平川”なのです。豊平川は、氾濫を繰り返しながらその河道を西から東へ変えていった暴れ川として知られていますが、元々は札幌扇状地の西縁を流路として八軒界隈から北へ流れ、篠路・茨戸あたりで石狩川に合流していたものが、縄文から続縄文に移り変わる頃には現在の伏古札幌川、そして旧豊平川から対雁方面にその本流を変えていったと考えられており、この流れが内陸部と沿岸部を結ぶ重要な交通路として機能していたのです。まさに N30 遺跡の人々は、豊平川を下って石狩川から外海へ出て、東北地方などとの繋がりを深めていたのでしょう。

さて、ここでもう一つ興味深い遺跡が登場します。それが、当時の豊平川下流域に位置し、石狩川からもほど近い場所にある「丘珠縄文遺跡（H508 遺跡）」です。N30 遺跡とほぼ同時期に営まれたこの遺跡は、無数のたき火跡と大量の土器や石器など、遺構・遺物の出土状況が N30 遺跡と酷似しています。ただし、両者が決定的に違うのは、丘珠縄文遺跡の方が標高が低く地盤の緩い北部低地に位置し、住居などの暮らしの痕跡が見つかっていないということです。これが何を意味するの

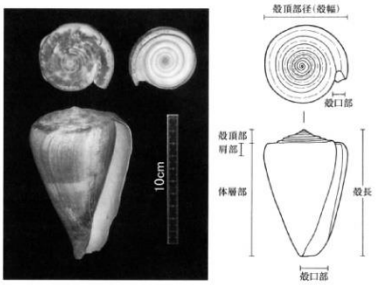
かは、今後の調査を待たなければなりませんが、丘珠縄文遺跡においては、N30 遺跡に比して、より顕著に東北地方との関わりがあることを、出土遺物から窺い知ることができます。特筆されるのは、「砂沢式土器」や「イモガイ形土製品」などが発見されたことで、砂沢式土器は東北地方の縄文晩期～弥生初頭に位置付けられる土器、切断したイモガイの殻頂部を模造したものとされるイモガイ形土製品は、北東北の縄文晩期に現れる特徴的な遺物であり、これらそのものが彼らとの直接的な交流を示す物的証拠と言えるのです。

丘珠縄文遺跡

東北地方北部から
持ち込まれた弥生土器

砂沢式土器
（青森県砂沢遺跡）

（出典：戸沢充則編1994
『縄文時代研究辞典』
東京堂出版）



伊豆諸島産最大種・カバミナシの現生標本と
イモガイ類貝殻部分名称・計測ポイント

（出典：忍澤成視2011『貝の考古学』同成社）

ほぼ同時に存在していたこのふたつの遺跡と北東北との関係性を考えるとき、点から線へと繋がるいくつもの風景が見えてきます。地盤が安定していて豊かな水が湧き出す扇状地に位置し、集落を養うに十分な環境が整っている「N30 遺跡」。低地部であっても活動拠点となる微高地が存在し、食用に資する動植物が豊富で、その目と鼻の先には、外海と内陸部をつなぐ玄関口となる石狩川河口部がある「丘珠縄文遺跡」。そして、それぞれの場所には、人か物が動かない限り、そこには存在し得ないものがあるということ。これらの遺跡は、縄文という時代にあっても、個人や集落単体では社会は成り立たない、あるいは社会自体、他者との関係性があって初めて成立し、そこから個性あふれる文化が生まれてくるという普遍の事実を、私たちに思い出させてくれます。

こういった遺跡を俯瞰すれば、縄文晩期に限らず、縄文時代全般にわたって列島各地には地域性があり、広い範囲で似たような土器をつくる文化や特定の地域でしか調達できない生活必需品（例えば、黒曜石やヒスイ、アスファルトなど）などの存在も考えると、相当早い段階で壮大な縄文の情報流通ネットワークが存在していたということを容易に想像することができます。

その後、縄文文化から続縄文文化に移り変わると、札幌は、南の弥生文化とサハリンなどからの北の文化が交わる拠点的な場所になっていきました。物流だけでなく文化の交流拠点としての役割を担う姿は、現在の札幌と通じるものがあります。

この札幌の地で、数千年も前に生きていた人々が作り、実際に使っていたホンモノの道具たちを目にしたとき、今の札幌のまちと暮らしが、縄文の暮らしの延長線上にあることを、まさしく肌で実感することができるでしょう。そして、地形や環境の変化に適応し、自然と共生しながら遙かな時を重ね、心豊かで安定した社会を実現した縄文人の暮らし方は、現代の私たちが目指す持続可能な社会について考えるヒントになり得るかもしれません。